

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01114

研究課題名(和文) 弥生時代渡来人のゆくえ 渡来人は本当に倭人に同化したか？

研究課題名(英文) Where have Toraijin, immigrants of the yayoi period, gone?

研究代表者

齋藤 瑞穂 (SAITOH, Mizuho)

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60583755

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：土器様式を単位とするこれまでの土器研究では、弥生時代前半代(早期・前期末～中期)に渡来した人々の動き・ゆくえを捉えることが難しかった。この問題を解決するために、本研究課題では土器型式を単位とする作風の伝習軌道を復原を試みた。結果、いわゆる「江辻SX-1段階」と板付(古)式との間に4つの階段を、また弥生時代中期については板付c(新)式から続須玖式までの間に11の階段をそれぞれ把握するに至った。これにより、早期は東日本からの九州渡来が明瞭になり、中期については金海式甕棺および鑄造鉄器の流入年代の抜本的見直しが必至となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、渡来人の列島内での動きに見通しがついたことにより、これまでの日韓交渉像の見直しを迫った点である。第一に、我が国の社会構造を一変させた弥生時代開始問題については亀ヶ岡式文化圏を含む列島全土を射程として検討する必要があるが出てきた。また、中期に関しては青銅器副葬の開始＝金属器文化の開始、鑄造鉄器の流入・拡散といった問題の見直しが必要になり、日本・韓国共同で取り組む研究が必要となった。

研究成果の概要(英文)：In previous pottery studies based on the unit of pottery styles, it was difficult to capture the movements and whereabouts of the people who immigrated during the early to middle stages of the Yayoi period. In order to address this issue, this research attempted to reconstruct the transmission trajectory of the unit based on pottery types. As a result, it was possible to identify 4 distinct stages between the so-called "Etsuji SX-1 phase" and the Itaduke I, and 11 stages between the Itaduke IIc and epi-Sugu. Consequently, it became clear that there was a migration from eastern Japan to Kyushu during the early stage, and a fundamental reassessment of the influx periods of Kimhae-style pottery coffins and cast iron artifacts became inevitable during the middle stage.

研究分野：先史考古学

キーワード：弥生時代 弥生文化 渡来人 土器型式 甕棺 須玖式 夜臼式 板付式

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の齋藤は、土器の型式学的分析と集落の構造分析とを車の両輪として、弥生時代社会の研究に取り組んできた。集落の構造とその変化を正しく捉えるには、時空間の枠組みづくりがあわせて重要であり、最新資料を含めた土器編年の整備に力を注いでいる。

とりわけ弥生時代渡来人の研究は、日本列島に来るまでに注目が集まり、来た後が明らかでなかった。それは、認識する方法論を欠いていたからであるが、渡来人たちが残した伝習の軌道が正しく復元できれば、そう難しいことではない。西日本各地の弥生時代遺跡から、朝鮮半島由来の無文土器が多く出土しており、この無文土器の特徴に別の要素が加わった「擬無文土器」もまた数多く出土しているからである。

2. 研究の目的

これまでの研究では、列島出土の「無文土器」は朝鮮半島からの渡来人1世が作り、「擬無文土器」は倭人と同化した2世や3世が作ったものとする。しかしこれは、土器製作の伝習軌道を正しく解明したうえで提示された理解でなく、オリジナルとの共通性の多・少によるものであり、説得性を欠いていた。さらに、遺構の切りあいや在来土器との関係を考慮しないものであるため、多くの問題があった。そこで、弥生時代前半期の在来土器と渡来土器、それらがともに出土する集落の分析を行うことで、この問題の前進・深化を図ることとした。

3. 研究の方法

土器型式に焦点をあて、土器型式を徹底的に細別して技術伝習の軌道を割り出す。1つの軌道が運動する様子からコミュニケーションの内容を読み取る(齋藤 2018)。すなわち、

⑦ A地域で続く軌道が、B地域に現れ、B地域でも軌道を形成する

④ A地域で続く軌道が、B地域に現れたが、軌道は形成しない、を弁別する。

⑦の場合に、A地域とB地域とで軌道を共有しつづけるのは強いコミュニケーションの持続を示し、分岐はその弱体化を示す。これらと集落の出現・持続期間・衰滅の状況とを比較することによって、渡来人の行方に迫ろうとした。

4. 研究成果

第1年度は、弥生時代開始期を対象として2019年5月28~30日に韓国・国立大邱博物館、同・国立慶州博物館で、8月3日に佐賀県文化財収蔵庫で、8月7日に粕屋町立歴史資料館で、8月23日に佐賀県立名護屋城博物館で、8月28日に佐賀市文化財整理室で、2020年3月21日に福津市教育委員会で資料調査を実施した。調査を経て、齋藤(2018)にもとづく細別分析を進め、技術伝習の軌道を割り出した。

その結果、既往の「夜臼式」は解体され、板付式に達する軌道と、別の特色ある軌道が存在することが判明した。この軌道を明示するための単位概念として黒土原式、礫石式、平尾二本杉式を設定した。黒土原式段階は、渡来人と九州島在来人の接触が確認されるが、極めて狭い範囲にとどまり、しかし長期に及ぶものではないことを読み取れた。

次の礫石式は、板付式の古い部分と時間的な接点をもつ土器型式である。この両型式間で種々の文化細目を比較すると、「渡来的要素」の受容と継承が異なることが判明する。その差異は、次の弥生時代前期末の渡来人の入植にも大きな影響を及ぼしたと推測される。

第2年度は、水稻農耕がもたらされた弥生時代開始期と、「国産」青銅器生産の始まった弥生時代中期の土器系譜と軌道を分析の対象とした。まず、弥生時代開始期(早期~前期)については、必ずしも明瞭とは言えなかった板付I式の内容と上下限を再定義したうえで、その成立に関わる人々の動態を分析した。結果、二系統の伝習軌道が併存し、それが融合することによって同式が成立した可能性が高いこと、融合の有無が板付式と礫石式の違いの要因であることを突き止めた。あわせて、黒土原式と「夜臼式」、礫石式と「夜臼式」・板付式との併行関係の整理を行った。板付I式は礫石(中)式と接点をもつ。なお、壺形土器の成立などこれまでの研究で渡来的要素として扱われてきた点については、若干検討の余地があり、「夜臼式」と渡来した人々との関係はさらなる検討が必要である。すでに指摘されているが、朝鮮半島から以外にも玄界灘沿岸に「渡来」した人々がいることは確実である。

また、三角形粘土帯土器の出現年代にあたる弥生時代中期については、「須玖式」に関するこんにちの参照枠が1980年代に相次いで提出され、以来用いられてきた。近畿地方や韓半島でも出土が知られ、人的交流や貿易を解明に導く一級資料であるが、しか

しながら、そもそも認定自体に問題を孕み、結果的に相当のズレが生まれてしまっている。そこで代表的な論者の説を点検して、ズレの実態を視覚化し、次いで精製土器に焦点を当てて再構造化に着手した。

第3年度は、半島系の俗称「粘土帯土器」が日本列島に多く出現し、かつ、「国産」青銅器生産が始まり、かつ階層化への道を本格的に歩み始めた弥生時代前期末～中期全般を総合的に扱った。緊急事態宣言の発令などがあって県外・国外での調査を行うことはできなかったが、それでも資料調査を4月18日、6月27日、10月24日、10月31日、11月23日、12月19日、2月23日に福岡市埋蔵文化財センターで、5月20日に九州大学考古学研究室で、7月10日に福岡市博物館で、11月4日に大野城市資料収蔵庫で、3月10日に大野城心のふるさと館で実施した。福岡市埋蔵文化財センターや福岡市博物館での調査は、弥生時代研究者との共同観察の形で実施し、有意義な意見交換も行うことができた。

その結果、東入部(古)・(新)式、須玖 a～e式、須玖 a～須玖 d式の諸式からなる細別編年案を提示するに至り、福岡周辺に2グループいた渡来人集団の動向を予察しうる結果も得られた。これとの検証を期して、甕棺との比較検討を実施した。これまでの研究は、資料の少ない時点の仮説的な枠組みを堅持する姿勢が目立ち、実態と大きく齟齬が生じていた。上述の資料調査により、弥生時代前期末と言われてきた俗称「金海式甕棺」はおしなべて中期初頭以降に属し、中期半ばまでの長期間に及んでいることが判明した。この成果を12月12日の九州史学会で速報した。

最終年度も引き続き、水稻農耕がもたらされた弥生時代開始期と、「国産」青銅器生産の始まった弥生時代中期に焦点を当てて研究を行った。関連する資料の調査を4月16日、6月25日、7月23日、9月3日、10月29～30日に、福岡市埋蔵文化財センターや志摩歴史資料館、九州国立博物館などで実施した。

まず、弥生時代開始期については、いわゆる「江辻 SX-1」の後から板付 式前夜までの土器様相を整理することにより、朝鮮半島からの人々の渡来と、東日本からの人々の渡来の関係が判明するに至った。これまでの研究では、この間を3つの段階を設けることで理解に努めてきたが、これを細別し5つの段階とすることで前後がスムーズに繋がる。この成果は投稿済み(掲載決定済み)で、2023年5月に刊行される予定である。

三角形粘土帯土器の出現年代にあたる弥生時代中期は、いわゆる「金海式」をはじめとする甕棺の年代、福岡平野における鑄造鉄器の出現年代に大幅な見直しが必至で、倭百余国が管掌した対外交易の展開が大きく見直されることが判明した。また、この時期の福岡平野では、周囲の自然環境も大きく変化していることが判明した。このことについては、さらなる検討を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 齋藤瑞穂	4. 巻 -
2. 論文標題 須玖式土器論序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集 上	6. 最初と最後の頁 131-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤瑞穂	4. 巻 43
2. 論文標題 板付式精製土器文様の構図	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 利根川	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤瑞穂	4. 巻 42
2. 論文標題 礫石式考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 利根川	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤瑞穂	4. 巻 105-1
2. 論文標題 須玖式土器の細別と大別	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 36-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤瑞穂	4. 巻 45
2. 論文標題 早期弥生土器再編	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 利根川	6. 最初と最後の頁 163-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 齋藤瑞穂
2. 発表標題 金海式甕棺前期末説・中期初頭説・中期前半説の再吟味
3. 学会等名 2021年度九州史学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤瑞穂
2. 発表標題 海辺と山裾の弥生時代史
3. 学会等名 福岡市埋蔵文化財センター令和4年度考古学講座「海と山がおりなす歴史」第2回 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤瑞穂
2. 発表標題 弥生土器の始まりを考える
3. 学会等名 2022年度弥生時代講座 聞いてなっとく 弥生の世界 第1回 (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------